

第2部 展示・イベント等事業レポート（2020年1月―12月）

第2部 展示・イベント等事業レポート

第1章 展覧会

荒俣宏の 大大マンガラクタ 館

基本情報

期間

6月1日[月]～9月27日[日]

(元々、2020年5月11日[月]～8月25日[火]を

「存在期間」とし、5月11日には展示も「存在」していたが、コロナ禍によるマンガミュージアム自体の休館(4月2日[木]～5月31日[日])のため、一般公開されたのは6月1日となった。)

開催日数

104日間

会場

京都国際マンガミュージアム 2階

ギャラリー 1・2・3

主催

京都国際マンガミュージアム/

京都精華大学国際マンガ研究センター

総合監修

荒俣宏(京都国際マンガミュージアム館長)

テキスト執筆

伊藤遊

空間構成

榊原充大/蔵蘭悠介

グラフィックデザイン

綱島卓也

英訳

ユースギョン(IMRC)/キャシー・セル

「大大マンガラクタ館」ロゴデザイン

三重野龍

担当

伊藤遊

実施概要 本展は、「世の中に忘れられたマンガの先祖たちを掘りおこし、現代マンガのルーツをさぐる」ということを目的に、荒俣宏マンガミュージアム館長が企画し、プロデュースする同館での小展示シリーズ「大大マンガラクタ館」の拡大版として企画された。●「マンガラクタ」とは、「だれかに発見されないかぎり、ずっとゴミくず同然に埋もれてしまう」ガラタこそを面白がる、という価値観を示した荒俣による造語だが、この拡大版では、多くの人が見向きもしなかったモノ、コト、ヒトを集め、文章や絵を書いたり描いたりすることで評価してきた荒俣自身の人生を、そのコレクションや創作物などで紹介した。●一方で本展は、「ガラタ」だったマンガ資料をアーカイブしてきたマンガミュージアムという存在そのものの意義について考えるという(裏)テーマを持ったものでもあった。その問いは、ひいては、モノや情報を収集し、保管し、活用する文化装置としての「ミュージアム」そのものの新しい価値について、来場者に考え直してもらうことも期待し、設定したのもでもある。●本展は、展示準備中にコロナ禍に見舞われたため、展覧会が完成しても一般公開できない可能性が予期された。そこで急遽展示プランを変更、展示予算の一部を、完成した展示を紹介する映像の作成にあて、YouTubeにて公開した。●また、2020年10月16日(金)～12月16日(水)、「稀書自慢」という新コーナーを付け加える形で、千代田区立日比谷図書文化館の特別展として巡回された。

[文責=伊藤遊]

展示構成

- ・ 漫画と人生
- ・ 怪奇文学大山脈
- ・ 図鑑の博物誌
- ・ アラマタ美術誌
- ・ 奇っ怪紳士録
- ・ 帝都物語
- ・ 展覧会の(裏)テーマ:〈(マンガ)ミュージアム〉とは何か?!
- ・ リード文(伊藤遊) [別掲1]
- ・ 「展示空間のコンセプトは「驚異の部屋」=「珍品奇品の所蔵庫」」(伊藤遊) [別掲2]
- ・ 「展覧会広報物の(儚い)一生とグラフィックデザイン」(綱島卓也) [別掲3]

展覧会紹介動画

撮影/編集

山根香

企画

榊原充大

主催/制作・配信

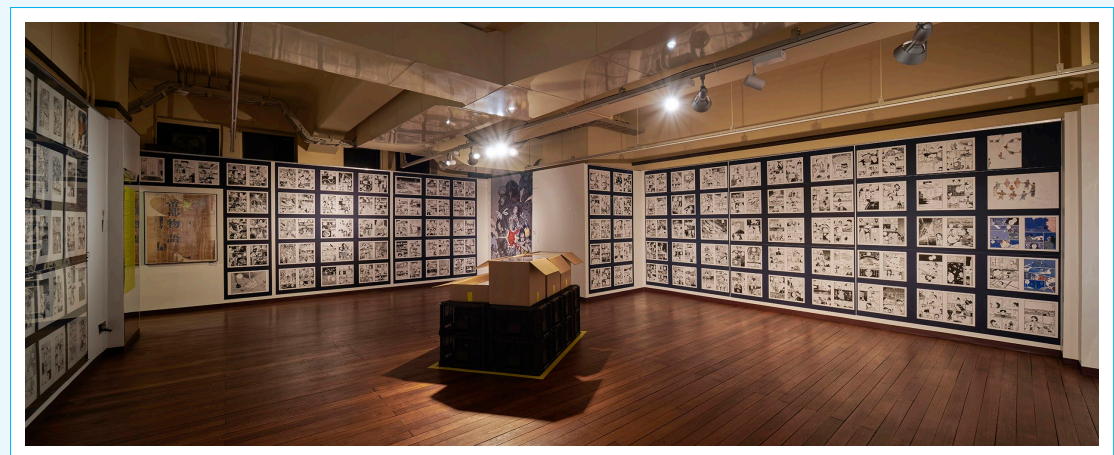
京都国際マンガミュージアム/

京都精華大学国際マンガ研究センター

展覧会紹介動画

- ・ 荒俣館長解説篇 | 00イントロダクション 1分00秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 01漫画と人生 2分29秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 02怪奇文学大山脈 2分40秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 03図鑑の博物誌 1分22秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 04奇っ怪紳士録 1分35秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 05アラマタ美術史 2分35秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | 06帝都物語 2分34秒
- ・ 荒俣館長解説篇 | インタビュー これからの〈(マンガ)ミュージアム〉はどうあるべきか? 3分40秒
- ・ キュレーター・イトウユウ解説篇その1 6分46秒
- ・ キュレーター・イトウユウ解説篇その2 5分46秒
- ・ CM篇
- ・ CM篇(会期延長版)

| 上記動画は、YouTube「京都国際マンガミュージアム」チャンネルで視聴可



主要参考文献

- ・ 荒俣宏『大博物学時代 進化と超進化の夢』工作舎、1982年
- ・ 荒俣宏「博物学 闇に投じた光に浮かぶ像」『現代思想』1985年2月号、青土社、1985年
- ・ 荒俣宏「博物学の熱中時代」『アニマ』1985年1月号、平凡社、1984年
- ・ 荒俣宏『増補版 図鑑の博物誌』集英社、1994年
- ・ 荒俣宏『漫画と人生』集英社、1994年
- ・ 荒俣宏『衛生博覧会を求めて』ぶんか社、1997年
- ・ 荒俣宏『悪趣味の復権のためのパッドテスト』集英社、1998年
- ・ 荒俣宏『アラマタ珍奇館 ヴンダーカマーの快楽』集英社、2000年
- ・ 荒俣宏『セクシーガールの起源』朝日新聞社、2000年
- ・ 荒俣宏・編『二十世紀イラストレ大全 少女マンガのルーツをもとめて』1-3、長崎出版、2004年
- ・ 荒俣宏『アラマタ美術誌』新書館、2010年
- ・ 荒俣宏「妖怪少年の日々 アラマタ自伝」『怪』vol.0046-『怪と幽』vol.004、KADOKAWA、2016-20年
- ・ 荒俣宏/島村義正/竹上昭「回想の『リトル・ウィアード』」『幻想と怪奇 1 ヴィクトリアン・ワンダーランド 英國奇想博覧會』紀元社、2020年
- ・ 荒俣宏/養老孟司/黒田日出男/西野嘉章「これは凄い東京大学コレクション」新潮社、1998年
- ・ 紀田順一郎『幻想と怪奇の時代』松籟社、2007年
- ・ 紀田順一郎『蔵書一代 なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか』松籟社、2017年
- ・ 『銀星倶楽部』第8号「特集 帝都物語」ペヨトル工房、1988年
- ・ 『太陽』1991年11月号「特集 荒俣宏の想像力博物館」平凡社、1991年
- ・ 『博物図譜とデジタルアーカイブⅢ』武蔵野美術大学美術館・博物館/造形芸術センター、2011年

関連記事

- ・ 木下直之「博覧強記の奇才の全貌「荒俣宏の大大マンガラクタ館」」『週刊文春』2020年7月9日号「その他の世界」
- ・ イトユウ「「荒俣宏の大大マンガラクタ館」展、京都で開催 1960年代の貴重なマンガ同人誌など紹介」『朝日新聞』（大阪本社版）2020年7月28日夕刊「いまどきマンガ塾」〈<https://book.asahi.com/article/13591658>〉
- ・ 「知の怪人、荒俣宏の「LOW芸術」時代宣言」『芸術新潮』2020年11月号、新潮社、2020年
- ・ 春口滉平「コロナ禍休館中のミュージアムについての対話」『視る』第508（2020年5-6月）号、京都国立近代美術館、2020年

▶ | 別掲1

展示会の(裏)テーマ：
〈マンガミュージアム〉
とは何か？！

伊藤遊

いまから15年ほど前、「マンガミュージアム」を作ります、と宣言した時の反応は様々でした。多くの人は、「マンガ」と「ミュージアム」の組み合わせを、まるで解剖台の上でミシンとコウモリ傘が並んだかのような突拍子のないものと感じ、戸惑っていました。●少なくないマンガファンやマンガ評論家からは、「ミュージアム」という制度化された容れ物に押し込めてしまうことで、「マンガ」文化が持っているエネルギーを矮小化させてしまう、という否定的な声を聞きました。同様のことは、マンガの展示会、つまり「マンガ展」に対しても聞かれたことばでした。●京都国際マンガミュージアムの15年間は、マンガ展を作りながら、「マンガ/ミュージアム」は何のためにあるのか、ひいては、そもそも「ミュージアム」とは何なのか、ということを目撃し続けてきた日々だったと言っても過言ではありません。こんなことを毎日考えているミュージアムは、世界広しと言えど、マンガミュージアムくらいではないでしょうか。●しかしながら、状況は変わりつつあります。昨年開催されたICOM(国際博物館会議)京都大会で、マンガは重要なテーマとして取り上げられ、「マンガ展の可能性と不可能性」と名付けられたパネルディスカッションでは、世界中のミュージアム関係者500人以上が耳を傾けました。多くの関係者は、現状の「ミュージアム」に限界を感じているのかもしれませんが。実際、ICOMでは現在、約40年ぶりに「ミュージアム」の定義を見直しているところです。●当館の荒俣宏館長が研究してきた博物学史や「^{ヴンダーカマー}驚異の部屋」、衛生博覧会などは、「ミュージアム」が今のように制度化される以前の、面白いものは何でも取り入れようとした混沌状況だと言えます。この〈^{プレ}原ミュージアム〉を、「マンガ」というサブカルチャーが「ミュージアム」と出会うようになっている現在と重ねること、未来の〈^{スーパー}ミュージアム〉を考えてもらうこと、それこそが、この展示会の(裏)テーマです。

▶ | 別掲2

展示空間のコンセプトは
^{ヴンダーカマー}「驚異の部屋」=
「珍品奇品の所蔵庫」

伊藤遊

「ミュージアム」あるいは「展示会」というのは一種の「メディア」であり、「メディア」というのは、そこに入れられる素材(ここでは展示物)に対する、それらを扱う者(ここでは展示会キュレーター)の「解釈」であり「表現」そのものです。●「ミュージアムとは何か、展示会とは何か」ということを考えてもらうにあたって、ここではまず、この展示会の展示空間がどういったコンセプトで作られたかという、ふつうの展示会ではほとんど解説されないことを、あえてことばにしてみたいと思います。●本展の展示空間のコンセプトは、ずばり、^{ヴンダーカマー}「驚異の部屋」です。ヴンダーカマーとは、荒俣館長のことばを借りれば、「ヨーロッパが世界とつながり、さかんに奇妙な品物を輸入し始めた十六世紀」、貴族や豪商たちが競って作った「珍品奇品の所蔵庫」のこと。そして、「こうした好古家の人々が金にあかしてコレクションした珍品奇品から、よいものだけをピックアップして始まったのが、近代の博物館というわけ」です。●近代的ミュージアムは、「典型的なもの、スタンダードなもの」を集めることで「秩序の具現」を目指しますが、ヴンダーカマーは「ユニークなもの、特別なもの」を集める「破格の単体の集大成」であり、「無秩序」「未整理」をその本質とします。●「整理され恒久的な価値付けが行われたオブジェが住む」宝物倉として、「固定化しステロタイプ化した博物館」は、「ヴンダー[驚異]の作用が終えられ、代わって経済的価値や歴史的価値がそれぞれの品目にそなわったスリルを増幅させていく」こととなります。●この展示会は、荒俣館長言うところのヴンダーカマー=「ガラクタの集荷場」であることを目指しました。●会場に入ると、そこには、プラスチックのコンテナとコンテナしか見えません。整理されるのを待っている資料が積み上げられた収蔵庫のように見えたのであれば、大成功です。そして、そこに、「ガラクタであり未整理である」ことで担保されている「ヴンダー」=ワクワク感を感じていただけたら、幸いです。

参考文献 荒俣宏『アラマタ珍奇館 ヴンダーカマーの快楽』集英社、2000年 | 小宮正安『愉悦の蒐集 ヴンダーカマーの謎』集英社、2007年 | 西野嘉章・編『インターメディアテク 東京大学学術標本コレクション』平凡社、2013年 | ノトリック・モリエス、市川恵里・訳『奇想の陳列部屋』河出書房新社、2012(2011)年 | 村田麻里子『思想としてのミュージアム ものと空間のメディア論』人文書院、2014年 | 吉田憲司『文化の「発見」 驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店、2014年

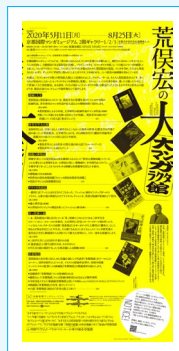
▶ | 別掲3

展覧会広報物の
(儚い)一生と
グラフィックデザイン
—
綱島卓也

社会から広く人々を集める必要のあるイベントが開催されるとき、広報のための印刷物が合わせて発行されるのが通例だ。フライヤー (チラシ)/ポスターと呼ばれるこうした印刷物は、イベントが開催される直前に配布が開始され、イベントが幕を閉じるとともに人知れず廃棄されていく。この予め定められた儚い一生を最大限価値のあるものにすべく、グラフィックデザイナー【*1】たちは日々奮闘している。●他のイベントと同様に、本展においてもフライヤーとポスターが発行された。会期から導き出される約3ヶ月という広報物の一生/博物学者、小説家、蒐集家として知られる荒俣宏氏の展覧会であるという情報/「珍品奇品の所蔵庫」という会場設計のコンセプト。これらの条件を元に生まれたのが、右(注:原文ママ)に示す広報物である。●セピア色のB2ポスターを断裁すると、A4変形のフライヤー [横=170×縦=297+67mm] 6種類が得られるという構成。ポスターを断裁している都合上、1枚のフライヤーのみではポスター面の図案を掴むことができず、6種のフライヤーをつなぎ合わせることでようやく全体を把握することが可能になるという仕掛けだ。この仕掛けは「蒐集」行為の後押しであるとともに、断片の集積=ミュージアム以前の混沌状況の提示でもある。●また随所で用いられている「蛍光イエロー」の色は3ヶ月という短い一生であるからこそ、選択可能な色であった。鮮やかな発色が特徴的な黄色は、その化学的な組成から太陽光(紫外線)下では急速に退色が進むという特性を持つからだ【*2】。●ところで、新型コロナウイルスの猛威を受け、本展広報物の一生は当初の想定よりもさらに短いものになってしまうようである。運良くフライヤーを目にしてくださった方は、ぜひ全種類をお集めいただいた上で、この蛍光色が時の流れとともに色あせていく姿をお楽しみいただければと思う。蛍光色が退色しきった頃には、かえって深みを増したセピア色と出会えることだろう。

脚注 【*1】手元の本によれば、「紙などの平面物に対して視覚的な構成を行い、第三者へ情報や感情を伝える」職業とのこと。未来を変えるデザインプロジェクト・編『DESIGN IS DEAD(?)』ダイヤモンド社、2017年、p.66 | 【*2】インキの退色については以下のサイトが詳しい。「光はインキを変えてしまう!? 退色とは…」(DICグラフィックス株式会社) (<<https://www.dic-graphics.co.jp/navi/color/fading.html>>) 2020年5月26日 閲覧

左
ポスター/フライヤー表面。
右
フライヤー裏面。



マンガ・パンデミックWeb展

基本情報

期間

2020年9月11日[金]ー12月25日[金]
(2021年2月現在、会期延長中)

会場

オンライン展覧会
<<https://www.mangapandemic.jp>>

主催

平和のための博物館国際ネットワーク/
京都精華大学国際マンガ研究センター

共催

京都国際マンガミュージアム/
立命館大学国際平和ミュージアム

展示アドバイザー

しりあがり寿/安齋肇

担当

吉村和真/伊藤遊

ウェブサイト制作

下元善光 (EIGHTY ONE Inc.)

ロゴデザイン

安齋肇/坂本志保

イラスト

しりあがり寿

実施概要 ヴァーチャル空間で「平和を展示する」ことを目的に、「パンデミック」をテーマにした作品を公募、展示した「オンライン展覧会」。

●当初は、「平和のための博物館国際ネットワーク(INMP)」が日本で開催する国際会議の関連事業として、「平和」一般をテーマとする(リアル)展覧会「へーわボケ漫画展」を計画していたが、その準備中、コロナ禍に見舞われたことを受け、(平和=「暴力の不存在」を脅かすものとしての)コロナ禍をテーマとする、オンライン上の展覧会として開催することに企画が急遽変更された。

●また、ももとの計画では、当方が選んだマンガ家に作品制作を直接依頼する形が想定されていたが、オンライン展の特性を生かすため、会期中に作品を公募し、届いたものから「ギャラリー」に公開していくという〈成長する展覧会〉を目指すことになった。作品が届かないのではないかという心配は見事に裏切られ、9月11日ー11月30日の公募期間中、50ヶ国・地域の345組から、1041作品が集まった。

●過去の有名絵画のパロディや「無人島もの」など、伝統的な一コママンガの作法で描かれた作品も少なくなかったが、総体で見ると、時期や地域によって刻一刻と変化するコロナ禍下の状況をヴィヴィッドに映す貴重な記録となった。

[文責=伊藤遊]

展示構成

・ ギャラリー 1

「マンガ・パンデミック」をテーマに描かれた公募マンガ作品を展示。
(「お手本作品」として描かれたさそうあきらによる作品と、後に描き下ろされたすがやみつるによる作品は、本報告書末尾に別掲。)

・ ギャラリー 2

江戸期の浮世絵や明治期の諷刺画など過去に描かれたマンガミュージアム所蔵資料から、「マンガ・パンデミック」をテーマにした作品とみなしたものを紹介した。

関連事業1

オンラインシンポジウム

「マンガ・パンデミックWebシンポ」

日時

2021年1月29日[金] 18:00ー20:00

会場

Zoomウェビナーを使った
オンラインイベント

出演者

しりあがり寿/安齋肇/安齋育郎/田中聡/
吉村和真/イトウユウ[司会]

ー

詳細については別掲の報告を参照のこと

展評・報道・報告等

展評

・ 高嶋慈「マンガ・パンデミックWeb展」『artscape』「artscapeレビュー」
2020年10月15日号<https://artscape.jp/report/review/10164751_1735.html>

報道

・ 「コロナ禍の世界、問題提起「Web展」始まる」『中日新聞』2020年9月18日
・ 「コロナが生んだ暴力描く オンライン漫画展 テーマは「パンデミック」」
『京都新聞』2020年10月21日

報告

・ 新聞寄稿: 吉村和真「バーチャル展覧会「マンガ・パンデミックWeb展」
コロナに負けるな! 平和と暴力、視覚で考える」『朝日新聞』(大阪本社版)
2020年8月25日夕刊「いまどきマンガ塾」
ウェブページ<<https://book.asahi.com/article/13672645>>でも閲覧可

・ 口頭報告: 吉村和真「マンガに見る人間の所作〜「マンガ・パンデミックWeb展」を手がかりに〜」『比叡会議』2020年12月11日、オンライン会議

・ 口頭報告: イトウユウ「オンライン展覧会「マンガ・パンデミックWeb展」の挑戦」
『日本マンガ学会海外マンガ交流部会第13回公開研究会
コロナ禍から世界のマンガを考える』2021年2月6日、オンライン研究会

・ マンガ作品: しりあがり寿「マンガだって広がる」『くる日もくる日もコロナのマンガ』
KADOKAWA、2021年

・ コラム: イトウユウ「「医療マンガ展」の試み——京都国際マンガミュージアムの
2つの展覧会」一般社団法人日本グラフィック・メディスン協会・編
『日本の医療マンガ50年史 マンガの力で日本の医療をわかりやすくする』
さいかす、2021年(4月刊行予定)

関連事業2

特集棚えむナビ「パンデミック・マンガ」

期間

2020年9月5日[土]ー2021年1月15日[金]

会場

京都国際マンガミュージアム 1階 吹き抜け

ー

マンガミュージアム所蔵のマンガ単行本から、特定のテーマでセレクトした作品を紹介するコーナー「特集棚えむナビ」。

「マンガ・パンデミックWeb展」に合わせる形で、ゾンビマンガなど、「パンデミック」をテーマにした約50タイトルのマンガ本を手にとって読める形で展示した。

「ギャラリー 1」関連図版
掲載作品の一例。
京都精華大学
マンガ研究科の学生
からも応募があった。

エンゲイキ
「比叡山異界紀行
霧が立つ時に、
何かと出会える」
カ春雨
「令和2年の百鬼夜行」

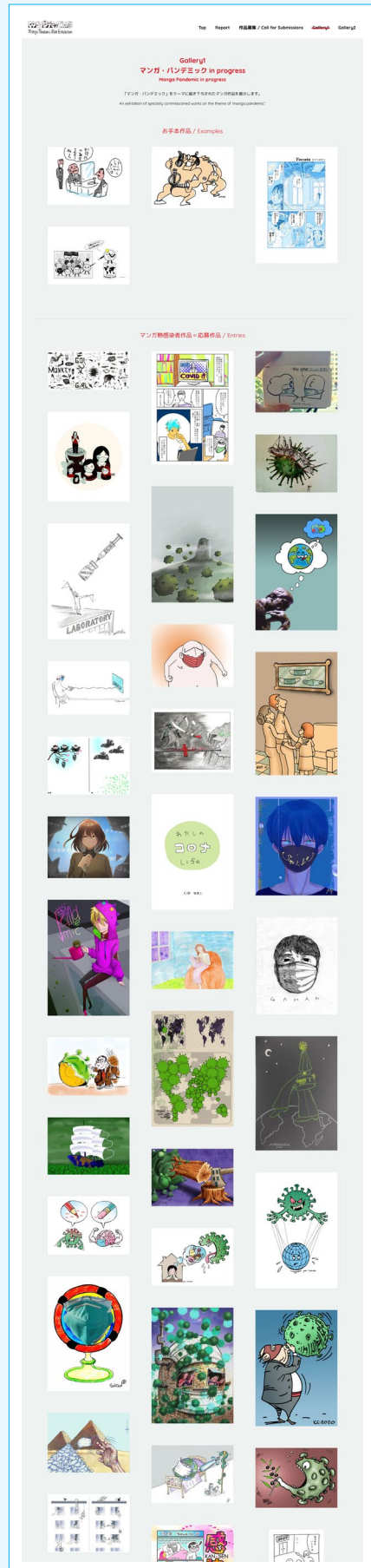
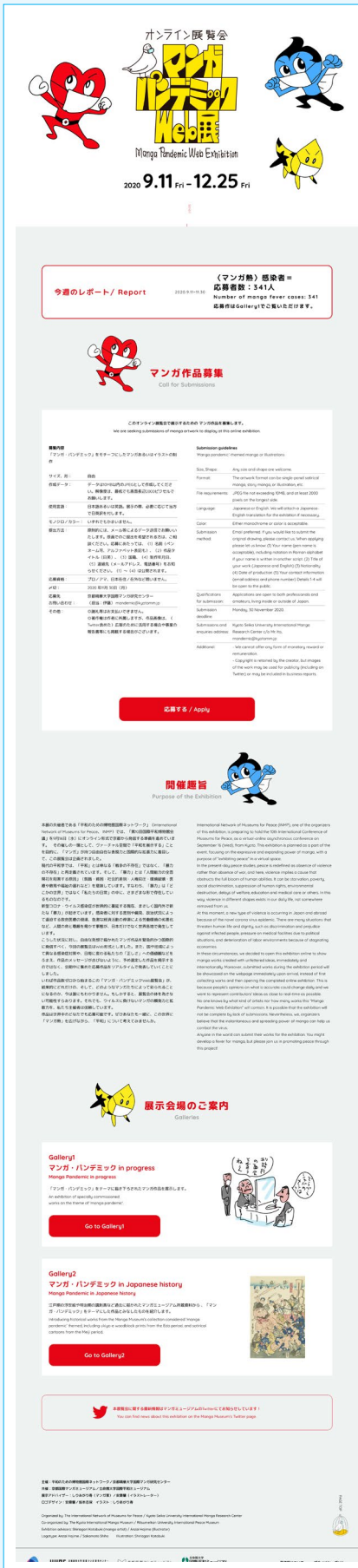


「ギャラリー 2」関連図版
掲載資料の一例。
歌川広景
「青物魚軍勢大合戦之図
(あおもさかなぐんぜい
おおかつせんのみづ)」
安政6(1859)年。

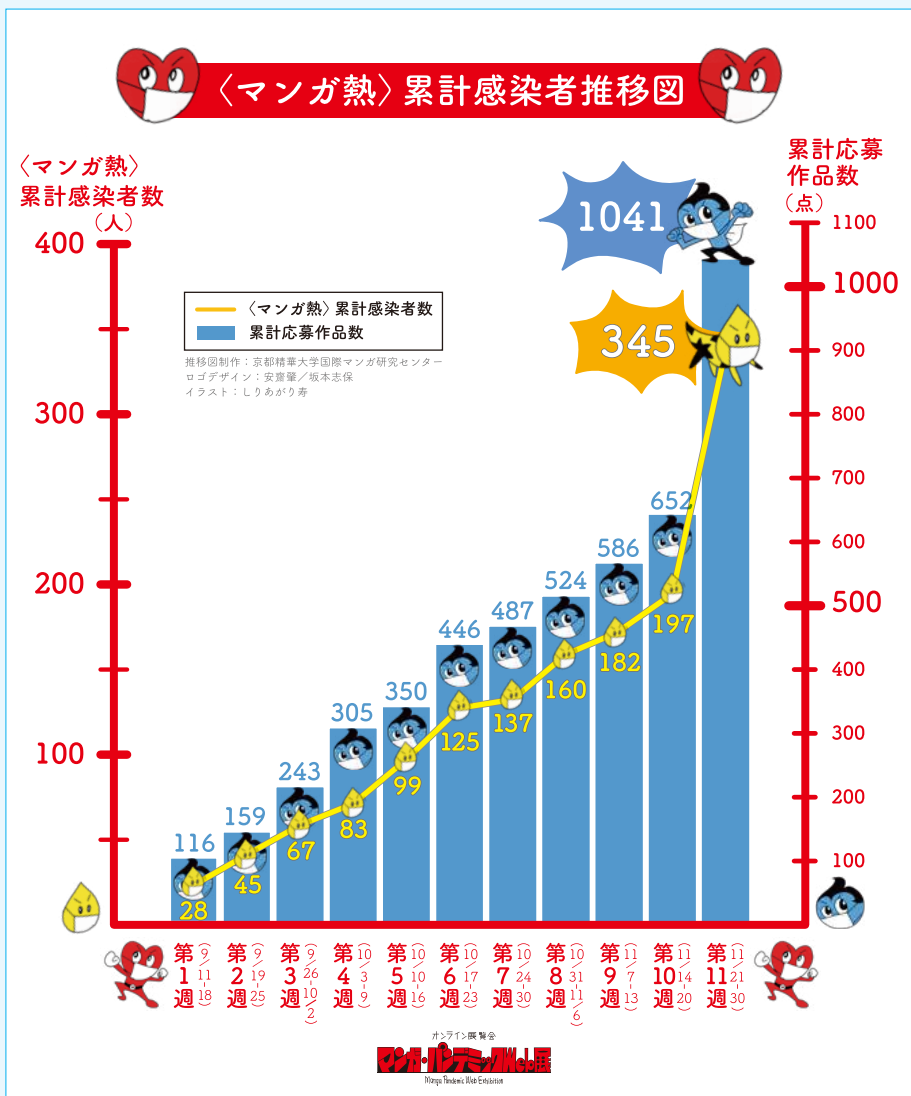


左
ウェブサイト
トップページの
スクリーンショット画像。
(2020年12月24日時点)

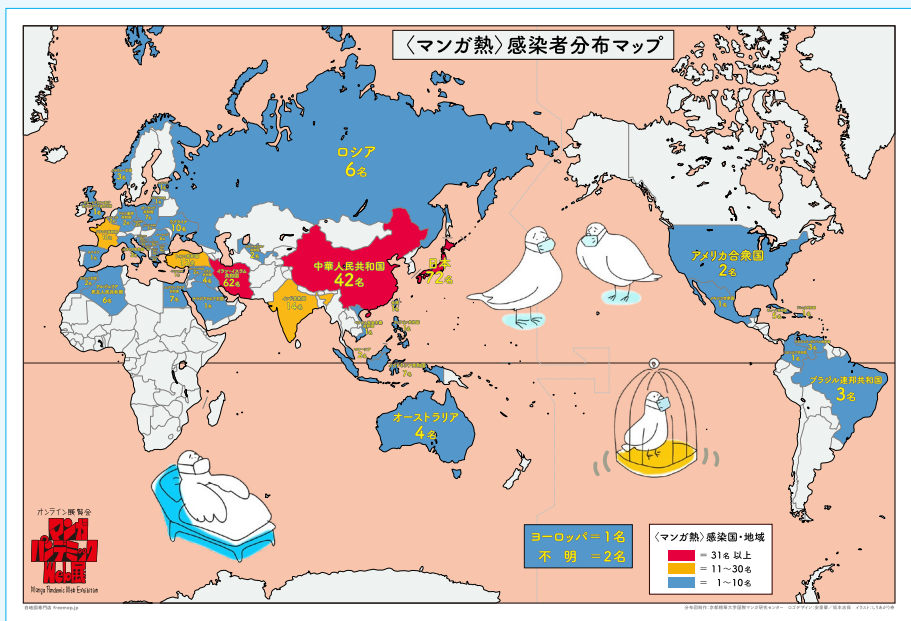
右
ウェブサイト「ギャラリー1」
トップページの
スクリーンショット画像。
(2020年12月24日時点)



「〈マンガ熱〉
累計感染者推移図」。
(グラフ制作=上岡杏子)



「〈マンガ熱〉
感染者分布マップ」。
(マップ制作=上岡杏子)



竹宮恵子監修 原画⁷(ダッシュ) 展示シリーズ 「もうひとつの 原画」展 ——東浦美津夫・ 飛鳥幸子・ ささやなえこ・ 忠津陽子

基本情報

期間

2020年10月29日[木]ー5月10日[月]

開催日数

151日

会場

京都国際マンガミュージアム 2階
ギャラリー 1・2・3

主催

京都国際マンガミュージアム/
京都精華大学国際マンガ研究センター

協力

トランクライザープロダクト

テキスト執筆

ユースギョン

グラフィックデザイン

上岡杏子/
西村映美(株式会社フルーツドロップス)

英訳

ユースギョン

設営

株式会社す屋吉

担当

ユースギョン

実施概要 退色等劣化しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるべく、マンガ家の竹宮恵子氏をプロジェクトリーダーとし、京都精華大学国際マンガ研究センターが実施してきた精巧な複製原画を研究・制作する原画⁷(ダッシュ)プロジェクト。2001年、竹宮氏の発案により始まった本プロジェクトの20周年を記念し、マンガ家の東浦美津夫・飛鳥幸子・ささやなえこ・忠津陽子4名の原画を元にした新作原画⁷を展示するとともに、原画⁷そのものの特徴や意義、活躍を振り返る展覧会を開催した。監修者・竹宮恵子の原画⁷も一部展示されたほか、ささやなえこの原画と原画⁷を見比べるコーナーも設けられた。

[文責=ユースギョン]

展示構成

- 各出展作家の原画⁷(ダッシュ) 作品 計152点
東浦美津夫 30点(「キノコちゃん」、「獅子丸一平」など)
飛鳥幸子 34点(「こもり男爵」、「白いリス」など)
ささやなえこ 36点(「生霊」、「凍りついた瞳」など)
忠津陽子 34点(「美人はいなか」、「お金ためます!」など)
竹宮恵子 18点(紙芝居「千夜一夜物語」)
- ささやなえこの原画 4点
- その他、雑誌・単行本など

関連記事

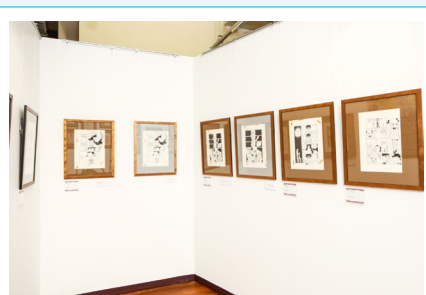
- ユースギョン「傷もそのまま『原画』プロジェクト20年 貴重なマンガ原画を再現、京都で展覧会」『朝日新聞』(大阪本社版) 2020年10月27日夕刊「いまどきマンガ塾」
<<https://book.asahi.com/article/13884996>>

ポスター



会場風景。

(Photo: saimon kaori)



「原画」(ダッシュ)裏話。
(マンガ=ユースギョン)

2 原画'(ダッシュ)のヒミツ



1 原画? 原画'(ダッシュ)?



第2部 展示・イベント等事業レポート

第2章 イベント

オード・ピコー×鳥飼茜 オンライントークショー 「日々、女子」

実施概要 アンスティチュ・フランセ日本の主催する「読書の秋」の関連イベントとして行われたオンライントークショー。フランスのバンドデシネ（フランス語圏のコミックスの総称）の作家であるオード・ピコー氏とマンガ家の鳥飼茜氏を招いて開催された。●出演者のオード・ピコー氏は数多くのバンドデシネ作品と絵本で知られており、現代女性の生き方を描いた代表作の「クレール（Idéal Standard）」は、2019年にDU BOOKSより日本語翻訳版も刊行された。「おんなのいえ」、「先生の白い嘘」などの作者・鳥飼茜氏は、女性や男性の生き方をリアルに描写した内容で注目されており、「先生の白い嘘」はフランスでも翻訳出版されている。●本イベントでは、日々の生活の中で女性たちを取り巻く問題を女性の視点から書き出した内容で多くの読者の支持を得ている二人に、作品のインスピレーションの源や女性としての経験などについて語ってもらった。

[文責=ユースギョン]

基本情報

期間

2020年10月24日[土] 18:00-19:30

出演者

オード・ピコー（バンドデシネ作家）/
鳥飼茜（マンガ家）/ユースギョン[司会]

視聴人数

200名

主催

アンスティチュ・フランセ日本

共催

北九州市漫画ミュージアム/
京都国際マンガミュージアム/
京都精華大学国際マンガ研究センター

協力

DU BOOKS/DARGAUD/講談社

ポスターデザイン

上岡杏子

担当

ユースギョン

ポスター



マンガ・ パンデミック Webシンポ

実施概要 オンライン展覧会「マンガ・パンデミックWeb展」の関連イベントとして、展覧会の企画メンバー全員が出演し、同展を総括する形で開催されたオンラインシンポジウム。

●伊藤による、展覧会の開催経緯や公募作品の一般的な傾向等の概説の後、他の出演者が、いくつかの作品を紹介しながら、展覧会全体を分析する視点を提供した。●例えば、海外の多くの作品と違って、日本の（特に若い世代による）応募作品には、伝統的な一コマ諷刺マンガの「マナー」から逸脱した作品が少なかったことを指摘したしりあがりは、その点をむしろ、新しい表現が登場する可能性として評価した。また、田中は、歴史学者の立場から、これらの作品には、現在における日常生活や日常感覚の記録としての価値があると述べた。●また、コロナウィルスを兵器として描いた作品の掲載を巡っては、「平和」の概念をどう考え、表現するべきなのか、写真にテキストを添えただけの作品の掲載を巡っては、そもそも何をもち「マンガ」表現とすべきなのか、ということ議論した裏話も披露された。●最後に、同時代の記録としての同展の意義が再確認され、なんらかの形で企画を継続していくことが同意された。

[文責=伊藤遊]

基本情報

期間

2021年1月29日[金] 18:00-20:00

会場

Zoomウェビナーを使用した
オンラインシンポジウム

主催

平和のための博物館国際ネットワーク/
京都精華大学国際マンガ研究センター

共催

京都国際マンガミュージアム/
立命館大学国際平和ミュージアム

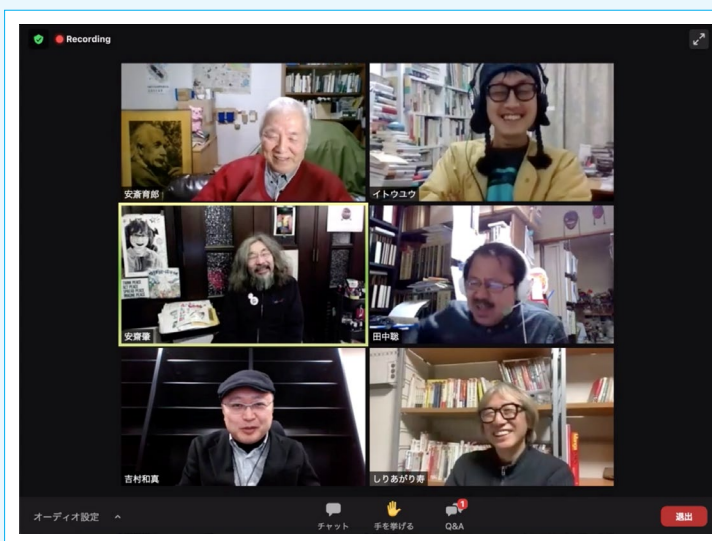
出演者

しりあがり寿(マンガ家)/
安齋肇(イラストレーター)/
安齋育郎(平和のための博物館国際ネットワーク
名誉フェネラルコーディネーター)/
田中聡(立命館大学文学部教授/国際平和
ミュージアム資料セクター長)/
吉村和真(京都精華大学マンガ学部教授)/
伊藤遊[司会]

担当者

吉村和真/伊藤遊

シンポジウムの様子



録画記録

本イベントの録画記録は、
YouTube「京都国際マンガミュージアム」
チャンネル(<https://www.youtube.com/channel/UC8Tdwn5Mtr2it6QAv5U8rrbA>)で視聴可。

第2部 展示・イベント等事業レポート

第3章 その他の事業

国内外での 展示等 協力事業

国内における協力事業

- 「GIGA・MANGA 江戸戯画から近代漫画へ」展
江戸期の錦絵から戦中のマンガ雑誌までのIMRC/マンガミュージアム所蔵資料約400点を紹介する形で制作された「江戸からたどる大マンガ史展〜鳥羽絵・ポンチ・漫画〜」(於・京都国際マンガミュージアム、2015年11月14日〜2016年2月7日、清水勲・監修)を元にした展覧会に、内容監修等で協力した。

—
《東北歴史博物館展》
期間 2020年7月4日〔土〕〜9月6日〔日〕
会場 東北歴史博物館
主催 東北歴史博物館/河北新報社/東北放送/毎日新聞社
共催 石ノ森萬画館
協力 京都精華大学国際マンガ研究センター/京都国際マンガミュージアム

—
《北九州市立美術館》
期間 2020年9月19日〔土〕〜11月8日〔日〕
会場 北九州市立美術館 本館
主催 GIGA・MANGA展実行委員会(北九州市立美術館/毎日新聞社/テレQ)
協力 京都精華大学国際マンガ研究センター/京都国際マンガミュージアム

—
《すみだ北斎美術館展》
期間 2020年11月25日〔水〕〜2021年1月24日〔日〕
会場 墨田区すみだ北斎美術館
主催 墨田区すみだ北斎美術館/毎日新聞社
協力 京都精華大学国際マンガ研究センター/京都国際マンガミュージアム

- 「荒俣宏の大大マンガラクタ館」展
|マンガミュージアムにおいて開催された同展の巡回に、内容監修等で協力した。

—
期間 2020年10月16日〔金〕〜12月16日〔水〕
会場 千代田区日比谷図書文化館 1階 特別展示室
主催 千代田区日比谷図書文化館
企画協力 京都国際マンガミュージアム/京都精華大学国際マンガ研究センター

- 「Inside/Out 映像文化とLGBTQ+」展
|詳細は別掲

海外における協力事業

- 「Shojo Manga —an introduction—」展 [インド・ニューデリー]
|詳細は別掲



インド・ニューデリー
における「Shojo Manga
—an introduction—」。



文化庁 メディア芸術 連携等 基盤推進事業

基本情報

担当

伊藤 遊（「マンガ刊本アーカイブセンターの
実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」
コーディネーター補佐）/
吉村和真（アドバイザー）

実施概要 マンガ資料（刊本および原画）のアーカイブ——〈収集〉〈整理・保存〉〈活用〉を
実践し、将来的なアーカイブ事業についてのマイルストーンを設定するとともに、その発
展のための体制を推進するネットワークの構築とそのハブとなる拠点の確立を目的とする
文化庁事業に関する中心的な役割を、IMRCが担った。

事業一覧

● 「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と 所蔵館ネットワークに関する調査研究」

事業の目的

5ヶ年計画の初年度となる2020年度の目的は以下の6点である。

- 1 刊本センターの実装化に向けた調査研究
- 2 所蔵館ネットワークの構築
- 3 専門人材の育成
- 4 デジタルアーカイブ化の準備
- 5 「マンガアーカイブ協議会」の発足と開催

連携機関・団体

- ・ 熊本大学
- ・ NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト
- ・ 北九州市漫画ミュージアム
- ・ 明治大学 米沢嘉博記念図書館
- ・ 高知県
- ・ 京都国際マンガミュージアム

● 「マンガ原画アーカイブセンターの実装と 所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」

事業の目的

5ヶ年計画の初年度となる2020年度の目的は以下の6点である。

- 1 相談窓口の開設
- 2 所蔵館ネットワークの構築
- 3 専門人材の育成
- 4 収益事業及び支援体制構築の調査
- 5 「マンガアーカイブ協議会」の発足と開催
- 6 メディア芸術データベース（ベータ版）登録に向けた調査研究

連携機関・団体

- ・ 横浜市増田まんが美術館
- ・ 北九州市漫画ミュージアム
- ・ 明治大学 米沢嘉博記念図書館
- ・ 青山剛昌ふるさと館
- ・ 高知県
- ・ 京都国際マンガミュージアム

京都国際マンガミュージアム／IMRC所蔵資料 および画像データ提供一覧(2020年1月－12月)

提供一覧

【資料名】	【データ/現物】	【提供先】	【用途】
・ 森田恒友「不時候と医者」『東京パック』第8巻第17号(1912年) ・ 森田恒友「路傍五道楽」『東京パック』第8巻第18号(1912年) ・ 森田恒友「最近社会漫画」/表紙画『サンデー』第10号(1909年) ・ 森田恒友「田舎に威張り都にすむ」『サンデー』第24号(1909年)	現物	埼玉県立 近代美術館	「森田恒友展 自然と共に生きて行かう」展 (於・埼玉県立近代美術館、2/1－3/22)における 展示および同展図録での掲載
・ 上田としこ、わたなべまさこ、竹宮恵子作品原画(ダッシュ) 各10点	現物	国際交流基金 インド・ニューデリー 事務所	「Shojo manga—an introduction—」展 (於・インド・国際交流基金ニューデリー日本文化 センターギャラリー、2/21－4/18)における展示 (新型コロナウイルス禍の影響により、 会期中途中で中止後、オンライン公開)
・ 加藤悦郎「巷説行革風景」『東京パック』 1937年新年号(1936年)	画像データ	信州教育出版社	『実力診断テスト社会 C編』 (信州教育出版社、2020年)での掲載
・ 石川進介「列外に気をとられるな」『漫画』1940年10月号	画像データ	河合出版	『共通テスト直前対策問題集 日本史B』 (河合出版、2020年)での掲載
・ 江戸期の戯画錦絵、明治期から戦中までの マンガ雑誌・単行本等336点	現物	東北歴史博物館	「GIGA・MANGA 江戸戯画から近代漫画へ」 展(於・東北歴史博物館、7/4－9/6)における 展示および同展図録での掲載
・ 『絵新聞日本地』第1号表紙	画像データ	豊島区立トキワ荘 マンガミュージアム	「豊島区立トキワ荘マンガミュージアム」(7/7開館) の常設マンガ史年表内の画像として展示
・ 『少年ジャンプ』創刊号(集英社、1968年) ・ 『マーガレット』創刊号(集英社、1963年) ・ 小島剛夕「すみだ川」(つばめ出版、1964年頃) ・ 手塚治虫「世界を滅ぼす男」(東光堂、1954年頃) ・ 赤塚不二夫「ひみつのアッコちゃん」第4集(きんらん社、1963年) ・ 模図かずお/下元克己/佐藤まさあき「17才 セブンティーン」 No.9 (佐藤プロダクション、1965年) ・ 水木しげる「忍者無芸帳 ある純真な少年の物語」白土三平/ 諏訪栄/楠勝平/水木しげる『忍法秘話』2巻(青林堂、1963年) ・ みきそのこ「小さなうそから」(東京漫画出版社、1960年代) ・ 竹宮恵子作品原画(ダッシュ) 5点	現物	大丸京都店	「Think LOCAL」プロジェクトによる マンガミュージアム紹介コーナー (於・大丸京都店エントランス、9/16－22) における展示
・ 江戸期の戯画錦絵、明治期から戦中までの マンガ雑誌・単行本等335点	現物	北九州市立美術館	「GIGA・MANGA江戸戯画から近代漫画へ」 展(於・北九州市立美術館、9/19－11/8)における 展示および同展図録での掲載
・ 竹宮恵子「緑点」原画(ダッシュ)	現物	早稲田大学 演劇博物館	「Inside/Out——映像文化とLGBTQ+」展 (於・早稲田大学演劇博物館、9/28－21/1/15) における展示
・ 小寺嶋甫肖像写真	画像データ	伊丹市立博物館	伊丹市立博物館友の会養成講座 「小寺嶋甫と伊丹」(於・伊丹市立博物館、10/10) におけるパワーポイントで提示
・ 藤原カムイ、荒俣宏・原作『帝都物語 Babylon Tokyo』 (角川書店、1988年) ・ 高橋葉介、荒俣宏・原作『帝都物語 TOKIO WARS』 (角川書店、1989年) ・ 萩原玲二「ナナ・ヌウ 地球暗黒記」(角川書店、1991年) ・ 水木しげる『水木しげる漫画大全集 妖怪変化シリーズ 全』 (講談社、2014年)	現物	千代田区 日比谷図書文化館	「荒俣宏の大大マンガラタ館」展 (於・日比谷図書文化館、10/16－12/16) における展示
・ 江戸期の戯画錦絵、明治期から戦中までの マンガ雑誌・単行本等335点	現物	すみだ北斎美術館	「GIGA・MANGA江戸戯画から近代漫画へ」 展(於・すみだ北斎美術館、11/25－2021年1/24) における展示および同展図録での掲載
・ 内山亜紀カラーイラスト20点	画像データ		『令和のあんどろトリオ あんどろagain』 (内山亜紀、2020年)付録ポストカード
・ 小林清親「眼を廻す器械」『團圓珍聞』第508号(1885年)	画像データ	小学館	『ニッポンの浮世絵100』vol.12(小学館、2020年) での掲載

原画'(ダッシュ) プロジェクト

実施概要「原画'(ダッシュ)」とは、コンピューターに原画を取り込んで色調整を重ねた上で印刷された、原画と並べても見分けのつかないほど精巧なマンガ原稿の複製である。退色しやすいデリケートなマンガ原稿の保存と公開を両立させるために開発され、マンガ家で京都精華大学元学長の竹宮恵子氏をプロジェクトリーダーに、京都精華大学国際マンガ研究センターと京都国際マンガミュージアムが共同で研究を進めている。●「原画'(ダッシュ)」プロジェクトでは、2001年以来、監修者・竹宮氏を含む作家27名の約850点の「原画」を制作してきた。2020年度の新規原画'制作は新型コロナウイルス禍のため見送られた。

基本情報

担当
ユースギョン

国内における原画'(ダッシュ)の活用

- 「もうひとつの原画」展～東浦美津夫・飛鳥幸子・ささやなえこ・忠津陽子～
|詳細は別掲

- **京都国際マンガミュージアムミニ展示**
|京都国際マンガミュージアムの紹介とともに原画'(ダッシュ) 5点を展示。

期間 2020年9月16日[水]～22日[火]
会場 大丸京都店 エントランス
主催 大丸京都店

- 「Inside/Out 映像文化とLGBTQ+」展
|戦後から2020年初めまでの映画とテレビドラマを主な対象に多様なLGBTQ+表象に着目し、製作ノート、パンフレット、スチル写真、台本、映像などの多彩な資料とともに歴史を振り返る展覧会。竹宮恵子の原画'(ダッシュ)「緑点」(「風と木の詩」)が'出展された。

期間 2020年9月28日[月]～2021年1月15日[金]
会場 早稲田大学演劇博物館 2階 企画展示室
主催 早稲田大学演劇博物館/演劇映像学連携研究拠点

海外における原画'(ダッシュ)の活用 原画'(ダッシュ)は、破損や紛失したら取り返しがつかない原画に替わって、国内だけでなく、フランス、ドイツ、オーストラリアなど、海外の展覧会にも積極的に出品されている。2020年には、国内外で計36点の原画'が'展示された。比較的輸送・展示・管理が'容易という特徴から、コロナ禍の中でも原画'に関する問い合わせは続いている。

- 「Shojo Manga —an introduction—」展
|インド初の少女マンガ展。日本の少女マンガを代表するマンガ家である上田としこ、わたなべまさこ、竹宮恵子の原画'(ダッシュ)が'展示された。主に女性作家により描かれ、女性読者に読まれる、世界でも珍しい「女性のメディア」であることや、年間数十種類の少女マンガ雑誌が発行され、作品によっては単行本累計発行部数1,000万部を超えるものも珍しくないほど人気の高いことなど、少女マンガの一般的な特徴も合わせて紹介された。

期間 2020年2月21日[金]～4月18日[土]
(新型コロナウイルス禍の影響により、会期途中で中止後、オンライン公開)
会場 インド・国際交流基金ニューデリー日本文化センターギャラリー
主催 国際交流基金
共催 京都精華大学国際マンガ研究センター/京都国際マンガミュージアム

IMRCメンバー業績等

業績一覧

さそうあきら Saso Akira	マンガ作品	- 連載「マンガ学部の脚本概論」『webアクション』双葉社、2020年5月15日より月1回の配信 (https://comic-action.com/episode/13933686331626984278) 「toccata」オンライン展覧会「マンガ・バンデミックWeb展」(2020年9月11日～12月25日)
伊藤遊(イトウユウ) Ito Yu	論説・コラムなど	「考現学でマンガをフィールドワークする 間取りと生活動線、人のしぐさと空間」『建築士』2020年6月号、公益社団法人日本建築士会連合会、2020年6月 「金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』ことばからマンガを読み解く」吉村和真/ジャクリヌ・ベルント・編『ブックガイドシリーズ 基本の30冊 マンガ・スタディーズ』人文書院、2020年6月 『朝日新聞』(大阪本社版)夕刊「いまだきマンガ塾」ユー・スギョン(IMRC)、雑賀忠宏(同)、倉持佳代子(京都国際マンガミュージアム)、吉村和真(マンガ学部)とのリレー連載(連載中)(https://book.asahi.com/writer/11001966) - 共同通信社「マンガ・時代のキーワード」全15回 『朝日中高生新聞』「マンガこの人この2冊」ユースギョン(IMRC)、雑賀忠宏(同)、倉持佳代子(京都国際マンガミュージアム)とのリレー連載(連載中)
	学会等発表	- 研究発表「学習漫画のドラマトゥルク」(山中千恵、瀧下彩子との共同発表) 「2020年日本マンガ学会オンライン研究発表会」(オンライン、2020年7月5日) - セミナー「漫画展示的教育意義[マンガ展の教育的意義]」(吳座聖、王伯文との共演) 企画展「滲透次元壁」(於・国立台湾美術館)関連イベント(オンライン、2020年10月24日)
	その他	- 科学研究費助成事業(基盤C)「『学習マンガ』の表現構造と制作現場における意味生成プロセスの実証的研究」(研究代表者=山中千恵)研究分担者 - 文化庁メディア芸術連携等基盤推進事業「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」コーディネーター支援者 - 文化庁メディア芸術祭選考委員
佐々木美緒 Sasaki Mio	学会等発表	- シンポジウム「デジタル時代の〈記憶機関〉芸術/大学における図書館・美術館・アーカイブ」『芸術資源研究センター (オンライン配信)』(オンライン配信、2020年11月28日) 桂英史、松山ひとみ、森野彰人、佐藤知久(司会)と登壇 - 研究発表「プラットフォームとしての図書館の役割——コロナ禍で露呈した物理的な公共空間としての弱さ」『芸術資源研究センターアーカイブ研究会 (オンライン配信)』(10月28日) (https://youtu.be/ZgcUwHwvC4A)
	その他	丸善雄松堂株式会社 児童サービス担当者研修講師(オンライン、2020年8月20日)
菅谷充(すがやみつる) Sugaya Mitsuru	マンガ作品	「ゲームセンターあらしと学ぶプログラミング入門 まんが版『こんにちはPython』」(描き下ろし単行本)日経BP、2020年5月 「ゲームセンターあらし」『コロコロアニキ』2021年冬号、小学館、2020年11月
	論文・コラムなど	- 査読論文「マンガは、なぜ、わかりやすいのか——実作者のメタ認知によるマンガの構造分析」『一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会発表論文集』2020年度版、一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会、2020年10月 - 査読論文「『かわいいキャラクター』に対するマンガ作者と読者の視点の比較」(李穎超と共著)『日本感性工学会論文誌』(早期公開) 2020年11月27日 「著者による著書紹介『ゲームセンターあらしと学ぶプログラミング入門 まんが版『こんにちはPython』』」『オンラインマガジン「ツクレル」』2020年11月21日
	学会発表・講演等	- 研究発表「マンガはなぜわかりやすいのか——実作者のメタ認知によるマンガの構造分析」『一般財団法人テクニカルコミュニケーター協会テクニカルコミュニケーション・リデザイン学術研究会 (オンライン発表会)』(2020年10月8日) 「『こんにちはマイコン』から『こんにちはPython』へ——時代を超えて」『公開講座京都アカデミアウィーク2020 (オンライン講座)』(於・京都アカデミアフォーラムin丸の内、2020年10月16日) 「これがオンライン講義だっ!」(青山学院大学教授/図書館長・野末俊比古とのオンライン対談)「第22回図書館総展ONLINE」(2020年11月14日) 「マンガは『文化』になれたのか?——産業・文化・教育の側面から探るマンガの実相」『視覚文化連続講座シリーズ(講演)』(於・平安女学院大学京都キャンパス、2020年11月21日)
	その他	「遠隔授業のつくりかた」京都精華大学FD研修講師(オンライン、2020年7月9日) - 関西大学総合情報学部非常勤講師「情報技術の現代史」(オンデマンド授業、受講生581名)

住田哲郎 Sumida Tetsuro	学会等発表	・ 口頭発表「文字によるキャラクターの創出とマンガにおける機能」役割語研究会(オンライン、2020年8月22日) ・ 口頭発表「マンガ翻訳に見る日韓両言語の翻訳可能性」韓国日本語学会第41・42回国際学術発表会(オンライン、2020年9月19日) ・ 口頭発表「マンガから得られる日本語の学びについて」台湾日本語学会、2020年台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム(オンライン、2020年12月12日)
ユースギョン Yoo Sookyoung	論説・コラム等	・ 「京都国際マンガミュージアム「荒俣宏の大大マンガラクタ館」展レポート」『文化庁メディア芸術カレントコンテンツ』文化庁<https://mediag.bunka.go.jp/article/article-17077/> ・ 「国際交流基金ニューデリー「Shojo Manga —an introduction—」展レポート」『文化庁メディア芸術カレントコンテンツ』文化庁<https://mediag.bunka.go.jp/article/article-17017/> ・ 「コロナ時代」マンガ文化に起きていること オンライン同人誌即売会さかんに…どうなるアナログ」『朝日新聞』(大阪本社版) 2020年5月26日「いまどきマンガ塾」<https://book.asahi.com/article/13413148> ・ 「傷もそのまま「原画」プロジェクト20年 貴重なマンガ原画を再現、京都で展覧会」『朝日新聞』(大阪本社版) 2020年10月27日「いまどきマンガ塾」<https://book.asahi.com/article/13884996> ・ 「朝日中高生新聞」『マンガこの人この2冊』伊藤遊(マンガ学部)、雑賀忠宏(国際マンガ研究センター)、倉持佳代子(京都国際マンガミュージアム)とのリレー連載(連載中) 学会等発表 ・ 研究発表「Self-reflection in manga by “foreign” artists」(伊藤遊との共同発表)「Shared Campus」(オンライン)<https://bit.ly/3jj2aZa> その他 ・ 「オード・ピコー×鳥飼茜オンライントークショー 日々、女子」(オンライン、アンスティチュ・フランセ日本・主催、2020年10月24日)企画・出演(司会) ・ オンラインマンガ教室 (オンライン、全4回、Resobox・主催、2020年11月)企画・実施<https://resobox.com/>
吉村和真 Yoshimura Kazuma	著作・論説・コラムなど	・ 学会シンポジウム録「マンガが描く食——『目玉焼きの黄身 ひとつぶす?』と行為としての〈食べること〉」(おおひなたごうと共に問題提起、佐藤守弘・司会)日本記号学会編『叢書セミオトボス15 食(メシ)の記号論:食は幻想か?』所収、新曜社、2020年6月 ・ 論説「マンガにとっての〈家〉とは何か——前景化する背景のメカニズム——」『建築士』2020年6月号、公益社団法人日本建築士会連合会、2020年6月 ・ 著作『ブックガイドシリーズ 基本の30冊 マンガ・スタディーズ』(ジャクリヌ・ペルントとの共編著)人文書院、2020年6月 ・ 学会基調講演録「マンガ大国・日本」の実態に迫る——マンガリテラシーとメディア環境を中心に——」台湾日本語言文藝研究学会第19回定例会(2019年12月7日実施、於・台湾長榮大学) ・ コラム『朝日新聞』(大阪本社版)夕刊「いまどきマンガ塾」伊藤 遊、ユースギョン、雑賀忠宏(IMRC)、倉持佳代子(京都国際マンガミュージアム)とのリレー記事(連載中)<https://book.asahi.com/writer/11001966> ・ 論説「ジョージ秋山さんを悼む」『朝日新聞』2020年6月13日夕刊 ・ 書評「ニール・コーン著『マンガの認知科学 ビジュアル言語で読み解くその世界』」時事通信社配信、『京都新聞』2020年8月16日ほか掲載 講演 ・ 東京都人権問題都民講座「スポーツマンガの系譜学——時代を表現する30作——」(2020年8月7日、オンライン) ・ 高槻市人権連続講座「差別と向き合うマンガたち——「黒人描写問題」を手がかりに——」(2020年10月2日、於・高槻市男女共同参画センター) ・ 鳥取県北栄町2020マンガのまちづくり推進研修会「全国に広がるマンガ施設と北栄町の可能性——なぜ自治体がマンガを扱うのか——」(2020年10月6日、於・北条農村環境改善センター) ・ 生駒市「人権を確かめよう日」記念市民集会「マンガを通して人権について考える——メガネ男子や方言女子のイメージはどう変わったか——」(2020年10月24日、於・生駒市コミュニティセンター) ・ 国際交流基金オンライントーク「SPIRITS OF ACTION Japanese Manga and Sports」(2020年10月28日、オンライン、国際交流基金ロンドン主催) ・ 精華町立図書館文学講座「マンガ読者のための図書館入門——あなたの知らない「マンガの影響力」——」(2020年12月19日、於・精華町交流ホール) など 社会貢献 ・ 文化庁令和2年度メディア芸術連携等基盤推進事業 各種委員(戦略委員会・主査、企画委員会・副査、マンガ原画事業・アドバイザー、マンガ刊本事業・アドバイザー、自治体連携会議・コーディネーター) ・ 文化庁令和2年度芸術選奨 選考審査員 ・ 高知県まんが王国・土佐推進協議会事業推進部会 部会員 ・ 横手市マンガ活用アドバイザー ・ まんが王国ととり国際マンガコンテスト 審査員 など